

今年も^{ことし} 典礼^{てんれい} 暦^{こよみ} に^そ 沿^{せんしゅう} っ^{すいようび} て、先^{すなわ} 週^{はい} の水^{すいようび} 曜^{はい} 日^{すいようび}、即^{さま} ち、灰^{じゆなん} の水^し 曜^{あずか} 日^し から、イエス^あ 様^あ の受^あ 難^あ と死^あ に与^あ る四^あ 旬^あ 節^あ が始^あ まりまし^あ た。いつもなら、その水^{すいようび} 曜^あ 日^あ のミサ^あ に与^あ る信^あ 者^あ の皆^あ さん^あ の頭^あ には灰^あ が載^あ せられるはず^あ でしたが、今年^{ことし} は公^{こう} 開^{かい} ミサ^あ が中^{ちゅう} 止^し され、その大^{だい} 事^じ な儀^ぎ 式^{しき} が行^{おこな} えませ^あ んでした。その儀^ぎ 式^{しき} は悔^く い改^あ めの徴^あ で、今^{いま} までの自^じ 分^{ぶん} の罪^{つみ} や悪^{わる} い習^{しゅう} 慣^{かん} を反^{はん} 省^{せい} し、これからはそ^あ うい^あ った過^あ ち^あ を繰^あ り返^あ さないよ^あ うにしようとい^あ う決^{けつ} 意^い の表^{ひょう} 明^{めい} でもあり^あ ます。その灰^{はい} を頭^{あたま} に載^あ せてから、全^{ぜん} 世^せ 界^{かい} のカト^あ リ^あ ック^あ 信^{しん} 者^{じゃ} は自^じ 分^{ぶん} の罪^{つみ} の償^{つぐな} いとし^あ て祈^{いの} りと愛^{あい} を実^{じつ} 践^{せん} する四^し 旬^{じゆん} 節^{せつ} を過^す ぎし始^あ めま^あ すが、その4^{よん} 0^{じゅう} 日^{にち} の旅^{たび} 路^じ はた^あ だの苦^く し^あ み^あ の道^{みち} ではあり^あ ませ^あ せん。その旅^{たび} 路^じ で私^{わたし} たち^あ はイエス^{さま} 様^あ と改^あ め^あ て出^あ 会^あ う豊^あ かな恵^あ み^あ を味^あ わ^あ えるの^あ です。イエス^{さま} 様^あ は私^{わたし} 達^あ と共^あ にそ^あ の道^{みち} を歩^あ んで^あ くだ^あ さり、私^{わたし} たち^あ がそ^あ の道^{みち} でた^あ め^あ らうこ^あ となく、最^{さい} 後^あ ま^あ で歩^あ めるよ^あ うに力^{ちから} づ^あ けて^あ くだ^あ さい^あ ます。また、イエス^{さま} 様^あ は私^{わたし} たち^あ がそ^あ の道^{みち} に迷^{まよ} わないよ^あ うに、自^{みずか} らが道^{みち} 案^{あん} 内^{ない} 人^{にん} とな^あ って、私^{わたし} たち^あ の歩^あ み^あ を導^あ いて^あ くだ^あ さい^あ ます。実^{じつ} は、そ^あ の道^{みち} の案^{あん} 内^{ない} 人^{にん} は、イエス^{さま} 様^あ しか^あ いませ^あ せん。な^あ ぜ^あ なら、誰^{だれ} よりもイエス^{さま} 様^あ ご自^あ 身^{しん} がそ^あ の道^{みち} を正^{せい} 確^{かく} に知^あ っ^あ てお^あ られるから^あ です。事^じ 実^{じつ}、イエス^{さま} 様^あ は私^{わたし} たち^あ に先^{さき} 立^だ っ^あ て、自^{みずか} らそ^あ の道^{みち} を歩^あ まれ^あ ましたが、それ^あ は私^{わたし} たち^あ をそ^あ の道^{みち} に導^あ くた^あ めのこ^あ とで、私^{わたし} たち^あ は今^{きょう} 日^{にち} の福^ふ 音^{いん} を通^あ して^あ それ^あ が分^わ か^あ り^あ ます。

ぞんじ とお さま かつどう せんれいしゃ せんれい う はい
ご存知の通り、 イエス^{さま} 様^あ のメ^あ シ^あ ア^あ とし^あ ての活^あ 動^あ は、洗^{せん} 礼^{れい} 者^あ ヨ^あ ハ^あ ネ^あ の洗^{せん} 礼^{れい} を受^あ けて^あ から始^あ まりまし^あ た。

ふ し ぎ かみさま せいれい とお さま あ の おく だ あ
 しか^あ し、不^ふ 思^し 議^ぎ なこ^あ とに、神^{かみ} 様^{さま} はま^あ ず、聖^{せい} 霊^{れい} を通^あ して^あ イエス^{さま} 様^あ を荒^あ れ野^あ に送^あ り出^あ され^あ ました。そ^あ の荒^あ

の さま よんじゅうにちかん やじゅう おど あくれい いろいろ ゆうわく う
 れ野^あ でイエス^{さま} 様^あ は4^{よん} 0^{じゅう} 日^{にち} 間^{かん}、野^あ 獣^{じゅう} の脅^{おど} かし^あ や、悪^{あく} 霊^{れい} から^あ の色^あ 々^あ な誘^あ 惑^{わく} を受^あ けね^あ ば^あ なりませ^あ んで^あ した。

もちろん てんし さま つか なに とおころ さま にんげん さまさま
 勿^あ 論^{ろん}、天^{てん} 使^し たち^あ がイエス^{さま} 様^あ に仕^あ えまし^あ が、と^あ にか^あ く、何^あ もない所^あ でイエス^{さま} 様^あ は人^あ 間^{かん} とし^あ ての様^あ 々^あ な

なや かつどう おも わずら たたか おそ しめい う と
 悩^あ み^あ や葛^あ 藤^{とう}、思^あ い煩^{わづら} いな^あ どと戦^あ われたはず^あ です。恐^あ ら^あ く、それ^あ にはメ^あ シ^あ ア^あ とし^あ ての使^あ 命^{めい} を受^あ け止^あ め

こば ほか ふくいん よんじゅうにち あいだ
 るか、それ^あ とも、拒^あ むかとい^あ うこ^あ ともあ^あ ったで^あ しょう。他^あ の福^あ 音^{いん} によ^あ ると、そ^あ の4^{よん} 0^{じゅう} 日^{にち} の間^{かん}、イエ

さま なに た う かわ あくれい いし か ようきゅう
 ス^あ 様^{さま} は何^あ も食^あ べ^あ ずにお^あ られまし^あ が、そ^あ の飢^あ え渴^あ きにつ^あ いて、悪^{あく} 霊^{れい} は石^{いし} をパ^あ ン^あ に変^あ えるよ^あ うにと要^あ 求^{きゅう}

よ なか とみ えいが み じぶん つか ため かみ
 したり、世^あ の中^あ の富^あ や栄^あ 華^あ などを見^あ せな^あ がら、自^あ 分^{ぶん} に仕^あ えるよ^あ うにと試^あ したり^あ したの^あ です。また、神^あ

さまがイエス様を守ってくださるかどうかを疑うようにとも誘いました。しかし、イエス様はその過酷な状況と執拗な誘惑のさなかで、ただ神様を信じ、また、神様の意向に従って、その全ての試練に打ち勝たれたわけです。そして、旧約時代の最後の預言者であった洗礼者ヨハネがヘロデに捕らえられ、自分の役目を終えた後、ついに、イエス様は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」という言葉で、メシアとして本格的に働き始められたのです。

イエス様は、神様の愛と慈しみをもって福音を宣べ伝え、多くの人々がその御言葉に耳を傾けて、神様への信仰を新たに整えました。また、他の人々は罪と悪から離れて、神様の愛に立ち返りましたし、多くの病人はイエス様に癒され、悲しみと苦しみの中にあつた人たちは慰めと勇気と希望を頂きました。しかし、その道はいつも喜びと栄光に満ちた道ではありませんでした。イエス様は、時には酷い反対の的となつて、様々な攻撃や試しを受けられました。特に、国の権力者たちや宗教指導者たちはイエス様を殺すため、執拗にその機会を狙っていたので、イエス様は常に殺害の危険にさらされておられたのです。そして、ついにイエス様は彼らの手で捕らえられ、異邦人によって十字架に付けられました。でも、イエス様は復活され、神様の愛と慈しみの勝利を証しされ、ご自身に従う人々、つまり、教会の頭として神様を信じる人々を今も同じ道に導いてくださるのです。その道は勿論、信仰と希望と愛の道で、私たちはその道を通つて、「新しい天と地」と言われる神様の国へ行けるわけです。こうしてイエス様はすべての人に眞の命への門を開かれましたが、その為にご自身の人生の道は荒れ野から始まつたのです。

ここで少し、今日の第1朗読について話したいと思つています。その時代、全ての人々が罪を積み重ねていて、神様は人間とご自身が造られた全ての物を大水で滅ぼすことにされました。しかし、ノアだけは神様に認められ、命を救うことができたのです。彼は神様の指示通りに大きな箱舟を造つて、その中で自分の家族や選ばれた動物たちと共に40日間の大雨と洪水から命を守りましたが、実際に彼

らが箱舟に留まったのは、一年と十日間でした。その後、水がすっかり乾いたのを確認したノアは、家族や動物たちと共に、箱舟から出て、空の虹を見つめながら、神様と新しい契約を結びました。想像したら、とても美しく見えますが、実際にノアが見たのはどんな風景だったのでしょうか。全てが無くなった大地、ゼロから始めなければならない荒涼とした大地の様子が彼らの目の前にあったでしょう。きっと、その荒れ野のような大地を目の前にしたノアは、神様だけが命の与え主であることをはっきりと悟り、自分には神様だけがおられることを心に深く刻んでいたに違いありません。

考えてみたら、イエス様の所謂公生活と言われる3年半は、荒れ野のようだったと思います。神様はイエス様の洗礼と荒れ野での40日を通して、メシアの道は荒れ野のような道であることを、前もって示されたかのような気がします。確かにイエス様は弟子達の招集から始め、その救いの道から開拓されましたが、それは神様と人々への愛によって出来たことです。それはまるで、箱舟を出たノアに託された道のようにでしょう。咎も罪も無かったノアでしたが、彼は大水の試練を経なければなりませんでした。しかし、神様は彼と新しい契約を結び、多くの人々がその祝福に与えるようにされたのです。ノアが受けた洪水の洗礼と箱舟から出たノアと神様との契約がそういうものであるなら、イエス様の洗礼と契約、また、その人生の道はどれほど恵み豊かでしょう。イエス様は罪も咎もない神様の独り子でありながら、多くの人々の悔い改めと救いのために新しい契約の血を流されました。それがイエス様の人生の道だったのです。それについては今日の第2朗読もはっきり語っています。イエス様は「正しい方」でしたが、「正しくない者たちのために苦しまれたのです。」私たちはその正しい方の洗礼に与り、また、その方の道に招かれた人達です。その道は世の中の栄光や富、名誉と権力を得るための道でなく、多くの人々の救いの為の道でしょう。その道で、私たちはイエス様の愛の働きを共にすることができるのです。私たちをその道に招いてくださった神様に感謝を捧げつつ、これからの四旬節も神様の恵みの中で過ごすことができるよう、お祈り致します。